



東日本大震災

フクシマはわたしの故郷である
赤坂憲雄 2

震災のあと
伊坂幸太郎 6

地震・サーファス・漂流民
大島幹雄 10

災害で見えてきたもの
木瀬公二 14

気仙沼からの憤り
熊谷達也 18

戸惑う者たちよ、語るべきその日を待て
黒木あるじ 22

壁を越えた日
斎藤純 26

光のページェントまで
佐藤賢一 30

希望があれば再興する
高成田享 34

絶望の縁から逃れて
高橋克彦 38

うしなわれた風景とまだ見ぬ風景
高橋義夫 42

「みちのく怪談」の時代へ
東雅夫 46

福島からの報告
星亮一 50

言葉に力はあるか
三浦明博 54

東北の魂は耐えて、震えている
山折哲雄 58

「復興」なんて誰がいった
山川徹 62

ハロー・ハロー、こちら非国民
吉田司 66

著者紹介 72

地震・サーカス・漂流民

ノンフィクション作家
石巻若宮丸漂流民の会事務局長

大島幹雄

三月一日私は愛知県犬山市にある日本モンキーパークにいた。一九日から始まる「かえってきた桃太郎——ロシアンシリュージョン」に出演するロシア人アーティストたちと一緒に仕込みをしていたときに、あのM9の巨大地震が東日本を襲いかかったことにいたる。このとき私はまったく揺れを感じていない。異変を知ったのは、電話が突然通じなくなつてからだ。同じ犬山市にあるリトルワールドにも私の会社で招聘していた「ワンダー空中サーカス」のメンバーがいたのだが、そこにいる会社の同僚との電話が突然通じなくなつた。東京の会社と電話もメールもつながらなくなつた。四時過ぎ電話がつながるようになつて、東北・関東でとんでもない規模の地震が発生したことを知つた。震源地は宮城県北部、震度は7だという。すぐに両親が住む仙台の実家に電話したが、つながらない。状況を知ろうにも東京の会社とは連絡がつかず、横浜の自宅には誰もいなかつた。妻と次女のふたりは韓国を旅行中で、この日の夜羽田に着く予定になつていた。夕方モンキーパークの事務所に行き、テレビのニュースを見て、事の重大さが少しずつ理解できるようになつた。事務所の人たちは、大きな地震が東北や関東であつたようですねと半分は人ごとだった。カザフスタンの友人、東京ドームでサーカス公演をしているロシア人から電話があつた。ふたりとも声が震えていた。心配しないで、自分は大丈夫と答えたが、それはまだこの惨劇の実態を知らなかつたからであつた。ソウルの空港で足止めを食らつた妻からも仙台の実家のこと問い合わせるメールが入つた。帰国は明日になるという。

宿舎に戻りテレビを見て、怖くなつてきた。いま目にしている恐ろしいことが、自分の生まれたところで起きているというのだ。この恐怖から逃れるため酒を飲んだ、そしていつのまにか寝ていった。朝方目が覚め、テレビを見ると、そこには名取の平野を浸食

していく津波の映像が流れていった。解説付きで……。なんと酷いことを。悪夢であつて欲しいと思つたが、これは現実であつた。涙がとめどなく流れてきた。

翌日現場で会つたロシア人たちの表情がこわばつている。ニュースを見て、そしてネットで流れている情報を見ていたのだ。両親が無事であるという連絡が弟から入つたのはこの日の夜七時だつた、周りのロシア人たちが全員拍手で喜んでくれた。確かに安心はしたが、惨劇は続いていたのである。夜のニュースで津波に襲われた故郷石巻の映像が流れた。津波の猛烈な爪痕を見るにつけでも辛いのに、街中には白い煙も立ちのぼつて、あちこちで火災がおきているようだつた。石巻が滅びていく、嗚咽が洩れた。そして背筋が寒くなってきた。私が事務局長をしている石巻若宮丸漂流民の会の会員の何人かは、この石巻、そして東松島に住んでいるのだ。今年一月末仙台で開かれた総会のあと酒を酌み交わした会の仲間たちの笑顔が目に浮かんできた。みんなどうしているのか、不安で身体が震えてきた。

津波だけではなく福島原発の異変が明らかになり、得体の知らぬ不安がひろがつてきた。三月二一日まで東京ドームで公演するサーカスのメンバーから電話がしきりにかかるてくる。公演は地震があつてから休演、テレビから流される津波の映像だけでも恐ろしいのに、今度は原発で爆発が起つたというので、不安は増すばかりだったのだろう。この時はあまり心配することはないと言えておいたのだが……。

一四日夜ロシア人の宿舎で、メンバーと食事を共にした。次第に明らかになる津波の被害、消息がわからない仲間たちの安否、不安がひろがる福島原発の爆発などストレスはたまる一方なのだが、ロシアの手料理と強い酒で無理やり気持ちを和らげていた。メンバーのひとりが、ロシアの旅行客は政府の命令で全員日本か

ら引き揚げたらしい、いま日本にいるのはサーカスのアーティストだけじゃないかと言うのを聞いて、思わず吹きだしたのだが、笑っている場合ではなかつたのだ。

リトルワールドサーカスの目玉となる番組「空中ブランコ」を派遣している国立モスクワボリショイサーカス団から、これ以上状況が悪化した場合はアーティストを帰してもらいたいという手紙がメールに添付され送られてきた。カスチユーク総裁直々の手紙だつた。いまメンバーがいるところは原発がある福島から遠く離れている中京地区、なにを血迷つてているのだろうと、最初はさきていたのだが、メンバーのところにも電話があり、日本は危険な状態なので帰つてくるようにといふ指示があつたというのを聞いて只事ではなくなつた。メンバーの代表がすぐに話し合つたと言つてきた。

このところ立て続けにウクライナ、カザフスタン、ロシアにいるサーカスの友人から、いますぐ家族と一緒に逃げてこいという電話がかかってきていた。大丈夫だから心配しないでと軽くあらつていただけだが、その時彼らがなぜそんなことを言つてきたのか、その根拠となつていたのが何だつたのか聞かなかつたのだが、日本がいま崩壊寸前だという情報が世界を駆けめぐつていたのである。

一夜にして状況は一変していた。まず東京ドームで公演していたサーカス団が残つて公演をすべてキャンセルして帰国することが決まつた。フジテレビ主催の「ルナレガーロ」名古屋公演に出演している同じボリショイサーカス団が派遣したサーカスチームの中でも真剣に帰国について話し合われているという。同じ中京地区にいるロシア人のなかで帰国が検討されていることが、リトルワールド、モンキーパークのメンバーに大きな動揺を与えていた。もしも公演前にメンバーがこのまま帰つてしまつたら、公

演はすべてキャンセル、それはそのまま私の会社が倒産することを意味している。この予想もしなかった事態に呆然となつた。翌日さらに事態は悪化した。「ルナレガーロ」に出演していた八名のアーティストが帰国するという。ボリショイサーカス団からまたメールが届いた。ロシア政府は日本にいるロシア人に対しても「日本を捨て（！）帰国するよう」に勧告している、この事態を不可抗力とみなし、メンバーの帰国を要求するというものだった。すでにロシア政府は在留ロシア人が帰国するために飛行機をチャーターしているという。ボリショイサーカスには、必ずアーティストの安全を最優先するという当社の方針を信じてもらいたい、こゝ愛知県は原発の影響もなければ、津波も地震も心配ない、我々の正しい状況について理解をしてもらいたいというメールを書いた。空中ブランコのチームにも、ここが東京よりも安全であることを説明し納得してもらった。メンバーはひとりひとり署名入りで、自分たちの意志でここに残るという手紙を書き、それをモスクワへ送った。モンキーパークのメンバーもインターネットで流れている情報が過剰なものであることに気付き、そして自分たちがいる大山と震源地の位置関係、そして福島からの距離を知つて、落ち着いてきた。彼らが判断するうえで、帰国することが、ひいては私たちの会社に決定的なダメージを与えることも考慮に入れてくれていた。こうして公演キャンセルという最悪の事態を回避することができた。長い呼び屋生活で初めて経験した公演キャンセルの危機であったが、メンバーが冷静に、そして私たちの会社のことまで考えてくれたことが、涙がでるくらい嬉しかった。

この間ライフラインが回復していない仙台の実家に横浜から必要なものを送つてもらつた。東京在住の漂流民の会の仲間から定形外書留で送ると二日後には石巻に着いたということを聞き、この方法で米や食糧を送りつけた。二週間ほどしてガス以外のライフラインが回復した。

犬山での公演が無事にスタートしたあと、二週間ぶりに自宅に戻り、本格的に漂流民の会のメンバーの消息をたずねることになった。犬山にいる時からから、ずっと連絡をし続けていたのだが、仙台の会員とは連絡がとれるのだが、石巻や東松島とは連絡がとれない状態が続いた。それでも仙台の会員の方がずっと連絡をとり続け、津波の影響をもろに受けた石巻門脇に住む理事の方や何人かの会員の方の無事を確認してくれた。当会の会員数八七名、その中で津波の被害を受けている石巻と東松島には三〇名の会員が住んでいた。地震から二週間後に東松島の会員五名全員の無事が確認された。一方警察の発表で石巻の七六歳の会員が亡くなつたことが判明した。一〇人ほど連絡がつかなかつたのだが、自宅に往復はがきを送つたところ、直接電話をもらつたり、ハガキが返送され八名の方の無事が確認された。現時点で二名の会員の安否が確認されていない。

無事は確認されても、その多くの方は家を失い、家族や友人知人を亡くしている。この悲しみと対峙しながら、元通りの生活をするまで長い苦難の道が待つている。理事の一人で、昨年からはじまつた会のプロジェクト、「若宮丸漂流民資料集」発刊の第一弾を担当したS氏が、こんなメールを送つてきた。総会の時に今年一月二七日若宮丸が石巻を出航した日にあわせて、資料集第二弾を出したいと抱負を語つていたときのうれしそうな顔をいまでもはつきりと思い出す。

皆様には大変ご心配をおかけしましたが、当方は何とか無事です。家の方は、津波で床上二メートルほども浸水し、大切な資料やデータが全て文字通り水泡に帰してしまいました。書庫は、基礎」と浮き上がり、やや傾いた状態で、今のところ中に



宮城県気仙沼市 3月28日

は入れそくもありません。蔵書は全部水没なので、今後の扱いが大変です。これから、復興に向けてのプログラムがスタートするとは思いますが、自宅で過ごせるようになるにはまだ日数がかかりそうです。まずは、仮住まいの発見と自宅の修復・書庫の再建、生活の再建が最優先。それからようやく歴史への挑戦ということで、活動は数年も先のことになります。それまでは、生活最優先で生きたいと思いますが、再生の折には、どうぞまたよろしくお願ひ申し上げます。

再生の折ではなく、生活の再建をするためにこそ、手助けが必要なのではないか。私は今まで好きなように生きてきた。東京の大学に入るとき故郷を去つてから、自分のためだけに一生懸命になつてきた。東北がいま直面している未曾有の危機のなか、自分のことなんかどうでもいいではないか、これからは被災に遭つた仲間たちの生活再建のため、そして故郷の復興のため生きいくべきではないか。何ができるか、いまはわからない、いつときだけの思いなのかもしれない、でも残された人生の全てとはいわなくとも、少なくとも半分以上は被災した人たちの生活再建のため、そして故郷復興のために捧げなくてはならない。これだけは決めている。

これを読んでいるうちにまた涙が流れてきた。そしていま自分がしなければならないことがおぼろげながらわかつってきた。